



現代の織 I 潮隆雄

《エピソード 15A(森の妖精)》

2015(平成27)年

洋画家、熊谷守一(1880~1977)の後40年を機に、書や日本画も含めた多彩な芸術表現を振り返ります。また、晩年の熊谷と縁交した平賀家、藤森武(1942~)による肖像写真を展覧会の一章にすえて、多くの人を魅了したその人物像についてもお伝えします。

2.特別展 自然を追い求める一写すこと、想うことー
南方熊楠・雑賀清子・内山りゆう

当地から世界に発信した博物学者、南方熊楠(1867~1941)の生誕150年を記念して、熊楠が最晩年で精力をかためたキノコの観察記録(図譜)を田辺市立美術館で展示します。熊楠は同時代に当地の自然に深い愛着をもってその愛を探求し、制作し、残ひつけている現代の画家、雑賀清子(1903~)の植物スケッチを田辺市立美術館で紹介し、平賀家、藤森武の植物スケッチを田辺市立美術館で紹介し、写真家、内山りゆう(1962~)の作品を熊野古道なかへち美術館で展覧します。

3.特別展 現代の織 I 潮隆雄
織による現代の造形表現を紹介する展覧会をシリーズで開催します。今年度は、タヌーニ表現の第一人者である、潮隆雄(1938~)の作品を田辺市立美術館で特集し、フランク・ロウ・プールの先駆者である、久保田繁雄(1947~)の作品を熊野古道なかへち美術館で展覧します。

4.施設品展 南面の絵と書
江戸時代中期以降、中国から多くの文物とともに伝わった「詩書画三絶」という思想に影響を受けた画家たちがそれぞれの時代で行った詩書画表現に注目して所蔵品の文人画・南面を紹介しします。

5.小企画展 神田一鶴と戦後の日本画
神田一鶴(1920~)の作品を主に戦後の日本画を紹介しします。

1.特別展 没後20年 脇村義太郎のコレクション
田辺市に生まれ、東京大学教授、日本学士院院長などを歴任した経済学者、脇村義太郎の没後20年を機に、美術研究者・愛好者としても類まれなる見識や造詣の深さを発揮した氏の収集したコレクションを、脇村家の山林業ゆかりの地にある熊野古道なかへち美術館で紹介しします。

2.特別展 自然を追い求める一写すこと、想うことー
南方熊楠・雑賀清子・内山りゆう

当地から世界に発信した博物学者、南方熊楠(1867~1941)の生誕150年を記念して、熊楠が最晩年で精力をかためたキノコの観察記録(図譜)を田辺市立美術館で展示します。熊楠は同時代に当地の自然に深い愛着をもってその愛を探求し、制作し、残ひつけている現代の画家、雑賀清子(1903~)の植物スケッチを田辺市立美術館で紹介し、写真家、内山りゆう(1962~)の作品を熊野古道なかへち美術館で展覧します。

3.特別展 現代の織 II 久保田繁雄
織による現代の造形表現を紹介する展覧会をシリーズで開催します。今年度は、タヌーニ表現の第一人者である、潮隆雄(1938~)の作品を田辺市立美術館で特集し、フランク・ロウ・プールの先駆者である、久保田繁雄(1947~)の作品を熊野古道なかへち美術館で展覧します。

4.施設品展 南面の絵と書
江戸時代中期以降、中国から多くの文物とともに伝わった「詩書画三絶」という思想に影響を受けた画家たちがそれぞれの時代で行った詩書画表現に注目して所蔵品の文人画・南面を紹介しします。

★ **連続講座「森と芸術」を予定しています。**
会場：田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館
田辺市立図書館



現代の織 II 久保田繁雄

2015(平成27)年

《Bright Forest III》

平成29年度展覧会案内

平成29年度展覧会案内

田辺市立美術館

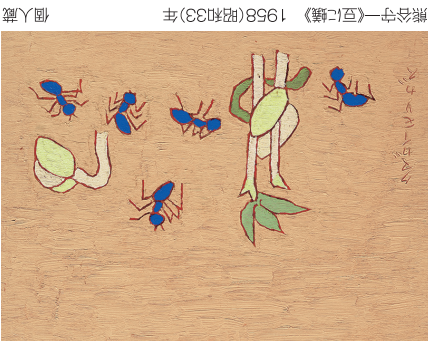
発行年月日：平成29年4月1日

編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館

田辺市立美術館NEWS ORANGE vol.26

〒646-0016 和歌山県田辺市たきない町2-4-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近藤891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/bjutsukan/
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahachibijutsukan/

熊野古道なかへち美術館



熊谷守一《豆に蠅》1958(昭和33)年 個人蔵

熊谷守一 書と絵と肖像

会場：田辺市立美術館

会期：4月22日(土)～7月2日(日)

絵画と出会う「この一点」

97年の長寿をまっとうした熊谷守一の生涯(1880～1977)も、けして穏やかなものではない。極端な寡作のために生活が困窮を極め、貧窮のなか、生きた6人のこともう3人に先立たれるという不幸にも遭っている。しかしそのような中であっても、熊谷は身の周りの自然を見つめ続け、内面の対話を重ねて、自身の表現を確立していた。そして生まれた、切りつめられた簡明な輪郭線によって対象を捉える、色面構成の画面は、「モリカズ様式」とも呼ばれる類ないもので、

今日も多くの人々を魅了し続けている。図版の《豆に蠅》もその優れた作品のひとつである。舞台となる土の触感や広がり、土後の植物、昆虫それぞれの生命感が、まさに生き生きと運動をも感じさせるように描かれ、小宇宙をそこに現出させている。「いのち」を見つめ続けた熊谷守一の、象徴詩ともいえるような世界がここにも広がっている。

(学芸員 三谷 涉)

熊野の森」はその後一週間公開し、その間も来館者の方が自由に紙の虫をくっつけて加えてゆけることができました。アーティストみなさんの手によって虫の棲む森が生まれ、それが日々変化していきます。

熊野の森」はその後一週間公開し、その間も来館者の方が自由に紙の虫をくっつけて加えてゆけることができました。アーティストみなさんの手によって虫の棲む森が生まれ、それが日々変化していきます。

熊野の森」はその後一週間公開し、その間も来館者の方が自由に紙の虫をくっつけて加えてゆけることができました。アーティストみなさんの手によって虫の棲む森が生まれ、それが日々変化していきます。

熊野の森」はその後一週間公開し、その間も来館者の方が自由に紙の虫をくっつけて加えてゆけることができました。アーティストみなさんの手によって虫の棲む森が生まれ、それが日々変化していきます。

熊野の森」はその後一週間公開し、その間も来館者の方が自由に紙の虫をくっつけて加えてゆけることができました。アーティストみなさんの手によって虫の棲む森が生まれ、それが日々変化していきます。

熊野の森」はその後一週間公開し、その間も来館者の方が自由に紙の虫をくっつけて加えてゆけることができました。アーティストみなさんの手によって虫の棲む森が生まれ、それが日々変化していきます。

(学芸員 知野 季里穂)



カミの虫・かみの森

かみ・カミ・紙ー谷内つねおとくるー

カミの虫・かみの森

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.26



雑賀清子《ゆきのした》

作品紹介 雑賀清子《ゆきのした》

雑賀清子(さいか・きよこ／1933ー)は長年にわたり自然を対象にスケッチを重ねてきました。特に身近な植物を好んで取材し、それらの姿を自身の存在と重ね合わせながら写してきたといえます。そのスケッチをもとに、白くて小さな花を咲かせたユキノシタの愛らしい姿が、小振りで横長の風炉屏風に記されたのがこの《ゆきのした》です。雑賀はユキノシタの印象を次のような言葉でも残しています。樹陰の風が通り過ると、白い小蝶がそって喜ぶ。そして又、静かになった。

風が吹いて花びらが揺れるという、私たちが何気なく見過ごしてしまいがちな一瞬にも、雑賀のまなざしはそこに詩と生命を見出します。雑賀の作品は、その温かなまなざしが形象化されたものといえるでしょう。描かれた小さな命は、私たちに柔らかな光を与えてくれます。

(学芸員 知野 季里穂)

自然を写すこと、想うこと

田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館が位置する紀伊半島の南部は、海、山、川と、それが育む多彩な生物種に恵まれ、その美しさ、豊かさがこの地域の大きな魅力のひとつとなっています。博物学、民俗学、植物学など広範な領域にわたって、日本の先駆的な研究者として認められ、今日もおその業績が色褪せない南方熊楠（みなかた・くまぐす／1867－1941）も、深い愛着をもってここに後半生を送り、当地からその研究の成果を世界へと発信しました。

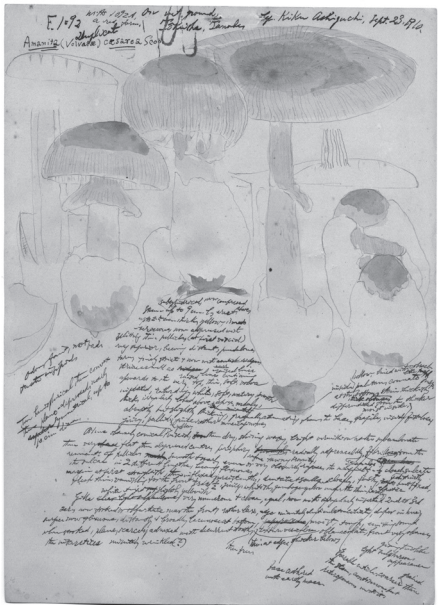
規定の枠組みにとらわれず、独自の視点から自らの生きる世界について省察を続けた南方が、最晩年まで精力をかたむけたのがキノコの採集と観察でした。南方が残したその記録（図譜）は、単なるスケッチを越え、西洋で発達したボタニカル・アート（植物細密画）にも通じるような、科学的でありながら芸術的感興を有する描画となっています。描かれたキノコとそれに関する詳細なメモで構成された図譜は、学者としての南方の姿をよく伝えてくれるとともに、南方の思考や感性までもそこに映しだされているようにみえます。

南方と同じようにこの地の自然に親しみをもってその姿を探索し、制作へと結びつけた現代の画家に雑賀清子（さいか・きよこ／1933－ ）がいます。和歌山県中部の美浜町に住む雑賀は1980年代のはじめ頃から、およそ30年間にわたって当地におもむいて植物の観察を続け、足下の草花に自分自身の存在を重ね合わせながらスケッチを描いてきました。そこには、ひたむきに生きる自然界の小さな存在が放つ命の美しさが込められています（今号の表紙に雑賀の作品《ゆきのした》の図版を掲載して紹介していますので、ご覧いただければと思います）。

淡水の生物をテーマにして水中写真を撮影し続けている現代の写真家、内山りゅう（うちやま・りゅう／1962－ ）は水の清らかさに引かれて東京から当地に居を移しました。以後、生物そのものから、それが生息する水の環境へとモチーフを展開した内山の写真は、記録を越えて自然界が有する生態系の貴さを強く訴えかける内容となっています。

ここに紹介した学者、画家、写真家の三人は、世代や表現方法は異なるものの、共通して目の前の自然をつぶさに観察し、写すことから、より広い世界へと想いを馳せています。この三人の活動と表現を紹介する展覧会を7月22日から9月24日にかけて、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館の二会場で開催します。田辺市立美術館では南方熊楠の図譜と雑賀清子のスケッチを、熊野古道なかへち美術館では内山りゅうの写真を展観します。展示の作品をよすがに、私たちを取り囲む自然に改めて目と意識を向けていただき、その中で生きることについて想いを巡らせていただけたら何よりのことです。皆様のご来館をお待ちしています。

（学芸員 知野 季里穂）



南方熊楠の菌類図譜（写真提供：国立科学博物館）



内山りゅう《降りそそぐ光》2008年9月 安川溪谷

INFORMATION

特別展：自然を追い求める－写すこと、想うこと－
南方熊楠・雑賀清子・内山りゅう

会 場／田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館
会 期／平成29年7月22日（土）～9月24日（日）
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日／毎週月曜日（但し9月18日は開館）
9月19日（火）
主 催／田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館
観覧料／田 辺 市 立 美 術 館：600円（480円）
熊野古道なかへち美術館：400円（320円）
※（ ）内は20名様以上の団体割引料金です。
学生及び18歳未満の方は無料

脇村義太郎の眼と交友

脇村義太郎（1900～1997）は後に田辺市名誉市民ともなる脇村市太郎の長男として現在の田辺市に生まれ、旧制田辺中学、旧制第三高等学校、東京帝国大学経済学部を卒業後、同大学助教授、教授などを歴任。戦後復興期には、船員中央労働委員会会長などを始めとする多くの政府関係機関の役職を務め、経済関係のプレーンとして活躍しました。

また、戦後神奈川県の逗子に転居し、疎開していた家族とともにこの地に定住、戦前から湘南に住んでいた文人や画家たちとの交流をはじめます。特に妻が謡曲や日本画を習っていた関係で、鎌倉に居をかまえていた画家の有島生馬や前田青邨と親しく交友していたことが縁となり、朝井関右衛門など鎌倉近辺に集っていた多くの画家、学者たちとも深い関わりを持つことになります。このことは自身の絵画に対する審美眼を磨くことに繋がっただけでなく、元々経済学者として培った洞察力や探究心とも相まって、美術作品に対する類まれなる造詣の深さや見識を発揮し、神奈川県立近代美術館や東京都美術館をはじめとする多くの美術館の運営に関与することにもなりました。

義太郎は郷里への思いも深く、父の市太郎とともに財団法人（現・公益財団法人）脇村奨学会を設立して役員に就任、南紀出身者の人材育成に努め、会の周年行事として自身が所蔵する美術作品を中心に郷里で展覧会を開催するなど文化活動の支援も積極的に行ないました。特に文人画のコレクションについては、弟の禮次郎が系統立てた収集を行っていたのに対して、あくまでも紀州ゆかりの作家にこだわって秀逸な作品を収集しました。

4月からの没後20年を機とする展覧会では、義太郎が生前収集したコレクションを、紀州をテーマに描かれた作品や、交友してきた作家たちとの関係がうかがえる作品を主に、脇村家の山林業ゆかりの地である熊野古道なかへち美術館で紹介します。

（主任 辰巳 充）



桑山玉州《玉津島奥崖図》



前田青邨《南の街（広州）》1960年



朝井関右衛門《脇村義太郎先生の像》1976年

INFORMATION

特別展：没後20年 脇村義太郎のコレクション
会 場／熊野古道なかへち美術館
会 期／平成29年4月22日（土）～7月2日（日）
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日／毎週月曜日
主 催／田辺市立美術館
観覧料／400円（320円）
※（ ）内は20名様以上の団体割引料金です。
学生及び18歳未満の方は無料

REPORT

「田辺市立美術館開館20周年コレクション展」

田辺市立美術館の開館20周年を機に、当館がこれまでコレクションしてきた日本の文人画と近現代絵画を3つの展覧会によって紹介する「田辺市立美術館開館20周年コレクション展」を、第1部は「文人画－南紀の画家たち」と題して田辺市立美術館を会場に、第2部は「現代絵画－戦後の抽象」と題して熊野古道なかへち美術館を会場に両展覧会とも9月17日（土）から11月6日（日）にかけて開催、第3部は「近代絵画－洋画の展開」と題して田辺市立美術館を会場に11月26日（土）から翌年1月29日（日）にかけて開催しました。

昨年度はこの開館20周年を記念した事業を多く行いましたが、本展覧会についても会期中、「文人画－南紀の画家たち」では9月24日（土）と10月16日（日）の2回、「現代絵画－戦後の抽象」では9月25日（日）と10月15日（土）の2回、また「近代絵画－洋画の展開」では11月26日（土）と翌年1月9日（月・祝）の2回、それぞれ学芸員による展示解説会を実施しました。

また、10月29日（土）には「美術館の歩みとこれから」と題したシンポジウムを開催、前半では「田辺市立美術館の歩みとコレクション」と題して、学芸員からこれまでの活動の経過やコレクションの内容について報告・解説を行い、後半では「田辺市立美術館のこれから」と題して、パネリストに元和歌山県立近代美術館副館長の浜田拓志さんや（公財）脇村奨学会の矢倉基兵衛さん、白井健子さんを招いてパネルディスカッションを行いました。

加えて、各展覧会の最終日（熊野古道なかへち美術館会場については最終日の前日）には、展示されているコレクションの中から1番好きな作品を選んでいただき、会場の皆さんの前で発表していただく《私の「この一点!」－あなたが選ぶ田辺市立美術館コレクションのナンバーワン－》という初めての試みも行いました。70歳代から高校生まで幅広い層の参加があり、参加者の方々から鋭い質問が寄せられるなど、館職員にとっても刺激を受ける内容となりました。

（主任 辰巳 充）

シンポジウム・展示解説会・私の「この一点!」



シンポジウム 昨年10月29日



私の「この一点!」 今年1月29日

記念講演会・展示解説会



記念講演会 「生誕110年記念 吉岡堅二展」



展示解説会 「戦後の日本画」

「生誕110年記念 吉岡堅二展」・「戦後の日本画」

今年の2月11日から3月26日にかけて、田辺市立美術館で特別展「生誕110年記念 吉岡堅二展」を、熊野古道なかへち美術館で館蔵品展「戦後の日本画」を同時に開催しました。

「生誕110年記念 吉岡堅二展」は、新しい時代の日本画の表現を追求して、1948（昭和23）年に結成された「創造美術」（現在の「創画会」）を創立した画家の芸術を振り返る、田辺市立美術館が継続して開催してきている展覧会シリーズのひとつでした。これと並行して熊野古道なかへち美術館で開催した「戦後の日本画」は、その「創造美術」の活動に共鳴して参画し、認められて、自らの芸術を確立していった次の世代の画家たちの表現を、収蔵する作品を主に紹介するものでした。

相互に関連する二つの展覧会場で、それぞれ二回の展示解説会を行い、また特別展については講演会も開催して、この二つの展覧会について理解を深めていただけるように図りました。

展示解説会では、当日集った参加者のみなさんとともに、順を追って作品を見てゆき、田辺市立美

術館では吉岡堅二の作風の変遷に注目しながら展覧会の内容を説明し、熊野古道なかへち美術館ではそれぞれの作家の個性を比較しながら解説を行いました。

田辺市立美術館で開催した「吉岡堅二の軌跡」を演題とした講演会では、展覧会であり紹介することのできなかった、画家の背景となった生い立ちや師の作風、最初期の作品などについて、図版をもとに重点をおいて解説した後、展示室で実際の作品を見ながら吉岡堅二の生涯をたどりました。

今回は展示解説会、講演会ともに、当館の学芸員が講師としてみなさんにお話をし、積み重ねてきた作家、作品についての調査、研究の成果を伝えることに努めました。不十分なところも多々でしたが、私たちとしても今後の課題がよく見えることとなり、改めて調査や研究に励みたいと思っています。これからも出来るだけ、このような機会をつくってゆきたいと思います。またみなさんのご参加をお待ちしています。

（学芸員 三谷 渉）

新収蔵作品について

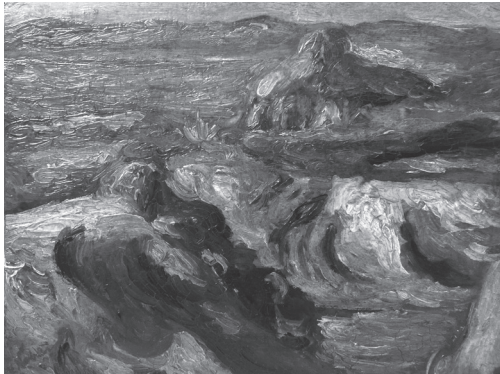
昨年度は雑賀清子（1933－ ）の作品4点を購入し、同じく雑賀の作品23点と鍋井克之（1888－1969）の作品1点のご寄贈を受けました。

雑賀清子は和歌山県美浜町に在住で、油彩画とステンドグラスの制作を主としてきた画家ですが、かたわらで1980年代のはじめ頃から、およそ30年間にわたって田辺市中辺路町周辺でのスケッチを重ねてきました。対象としたのはその自然で、特に雑賀は、足下の小さな草花をいとおしみ、それらに自分自身の存在を重ね合わせながらスケッチしたといえます。

購入した4点はそのスケッチをもとに描かれた屏風の作品です（その内の1点、《ゆきのした》（69.0×181.4cm／紙・水彩／二曲屏風）については、図版と解説を今号の表紙に掲載しています）。また同様の屏風2点と植物を描いた水彩画6点、雲をモチーフにした油彩画1点と水彩画14点のご惠贈をいただきました。雑賀の作品は、これまでもしばしば熊野古道なかへち美術館での展覧会を通して紹介してきましたが、昨年の2月から3月にかけて開催した「咲く－雑賀清子のスケッチより」は、今回の作品収蔵の契機となるものでした。今年夏の特別展では、初めて雑賀の作品を田辺市立美術館で展示します。

もうひとつの新しい収蔵作品、近代の洋画家、鍋井克之の《風景》（23.8×27.2cm／油彩・板／額装 ※下の図版）は、もともと同時代に活躍した洋画家、都鳥英喜（1873－1943）のご遺族のもとに残されていたものです。この作品の修復を手掛けられた方からのご厚志によって、ご惠贈いただくこととなりました。はっきりとした制作年は不明ですが、細かな筆触を力強く重ねて、内面を投影するような風景を描く表現は、鍋井が20歳代の半ば、1913－14（大正2－3）年頃、結成されたばかりの二科会に出品、入選して、画家として世に出始めた頃の作風を示しています。当館では鍋井について、油彩画だけでなく、日本画なども視野に入れて、画家の全体像を把握できるように収集を進めてきましたが、このような初期の作品は、これまで収蔵できていなかったものです。今回のご寄贈によって、当館の鍋井克之作品のコレクションは一層の深みをもつこととなりました。また、この作品は昨年の11月から今年の1月にかけての特集展示「紀南を描く洋画家－原勝四郎と鍋井克之」に出品して、早々に紹介する機会をもつこともできています。

（学芸員 三谷 渉）



鍋井克之《風景》

平成29年度

■ 田辺市立美術館

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示替のため休館	①特別展 熊谷守一 書と絵と肖像 4/22（土）～7/2（日）	展示替のため休館	②特別展 自然を追い求める－写すこと、想うこと－ 南方熊楠・雑賀清子・内山りゅう 7/22（土）～9/24（日）	展示替のため休館	③特別展 現代の織Ⅰ 潮隆雄 10/14（土）～11/19（日）	展示替のため休館	④館蔵品展 南画の絵と書 12/2（土）～1/28（日）	展示替のため休館	⑤小企画展 稗田一穂と戦後の日本画 2/10（土）～3/25（日）		

■ 熊野古道なかへち美術館

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示替のため休館	①特別展 没後20年 脇村義太郎のコレクション 4/22（土）～7/2（日）	展示替のため休館	②特別展 自然を追い求める－写すこと、想うこと－ 南方熊楠・雑賀清子・内山りゅう 7/22（土）～9/24（日）	展示替のため休館	③特別展 現代の織Ⅱ 久保田繁雄 10/14（土）～11/19（日）	展示替のため休館	④館蔵品展 南画の絵と書 12/2（土）～1/28（日）			展示替のため休館 ★連続講座「森と芸術」を予定しています 会場：田辺市立美術館 熊野古道なかへち美術館 田辺市立図書館	

展覧会スケジュール